

説教 『心を突き刺す恵み』山本 護 牧師
聖書 エレミヤ書 23：23～24／使徒言行録 2：37～39

五旬祭に聖霊で満たされた弟子たちは(使徒 2:4)、自分ならではの真実の言葉を獲得し(2:6)、確実に変化した。言葉を得たペトロの説教は、驚くべき力を表している(2:14～40)。「この約束は～遠くにいるすべての人にも～与えられているもの(2:39)」。「遠くにいる」とは、距離であり、環境であり、人間の資質でもあろう。神を「遠ざける」人の障壁は、神には何の障壁でもない。「神はこのイエスを復活させられた。わたしたちは皆、そのことの証人(2:32)」。だが証人である「使徒たちは、この話がたわ言のように思っていた(使徒 24:11)」。すなわち聖霊降臨とは、信じない「遠い者」が、自分の言葉を獲得し(使徒 2:4)、信じる出来事なのだ。信仰はいつも、イエスの言葉や十字架のように逆説的だ。

預言者は「わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。わたしは遠くからの神ではないのか(エレヤ 23:23)」と告げた。身近にいる者に目をかける神ではない。手柄を見てほだされる神ではない。人にはまるで知られない世の片隅の事柄をも、御自分の事とされる「遠くから」の神だ。「誰かが隠れ場に身を隠したなら、わたしは彼を見つけれないと言うのか、と主は言われる(23:24a)」。だから信じる者に孤独はありえない。キリストに従う者に虚無はなく、また密かに背くこともできない。

「人々はこれを聞いて大いに心を打たれた(使徒 2:37a)」。「心打たれ」という言葉は、元来「心を突き刺す」という謂で激しい心の痛みを表す。真実の言葉を聞いた者は知らぬふりができない。人々は使徒たちに「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか(2:37b)」と尋ねた。アカの他人がここで既に「兄弟たち」と呼びかけている。つまり「心が激しく突き刺され」、手続きに先じて心は早くも兄弟(共同体内での呼び方)になっている。それに応じてペトロは、彼らにはっきりと答える。

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい(2:38)」。今日の教会のような洗礼準備や信徒の心得などない。ただ悔い改め、洗礼を受けること。「悔い改め」とは、悔やみではなく反省とも違う。イエスの第一声は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい(マルコ 1:15)」という言葉だった。「悔い改め」とはそのまま方向転換の謂であり、囚われている自分を手放し、新たに出発すること。また「罪を赦してもらおう」とは、鷹揚に赦免されることではない。罪を「洗い落としてもらうこと」だ。何によって罪を洗うのか。「主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされる(1コリント 6:11)」。

洗礼を受けた者がその日に三千人いた(使徒 2:41)としても、悔い改めと罪の赦しは「めいめい(2:38)」のこと。なぜなら聖霊の炎の舌は「分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまる(2:3)」から。神に創造された人は、十把一絡げにできない。それゆえ、悔い改めはパターン化できない。御言葉が「心を突き刺している」とはいえ、人は応答として「悔い改めと洗礼」を自ら決断せねばならぬ。

「天をも地をも、わたしは満たしているのではないかと、主は言われる(エレヤ 23:24b)」。どこにいても、どんな時にも、永遠に満ちる神の命の内に私たちは在る。世の囚われから、そこへ解き放される。



【おまけのひとこと】

キリストは待っている 辛抱強く 人が悔い改めるのを 壊れやすい心を両掌でそっと包みながら
キリストは待っている 静かに微笑み 浸されて生まれる者を見守っている 祈りのまなざし